

小学校音楽科における リコーダー奏法の学習指導に関する提言

— 息づかい・指づかい・舌づかいの指導を中心に —

A Proposal for the Recorder Instruction in Music Classes at Elementary School: with Special Reference to Teaching Methods of Breathing, Fingering, and Tonguing

緒 方 満

Mitsuru OGATA

小学校音楽科におけるリコーダー奏法の学習指導は、適切に施されることが重要である。本稿では、リコーダー奏法の学習指導について、望ましい在り方を示すために以下の3点について提言した。①筆者自身の実践経験に基づきながら、一般的なリコーダー技術指導における指導上の留意点を、特に息づかい（ブリージング）、指づかい（フィンガリング）、舌づかい（タンギング）の3つに視点をあてて述べた。②広島市内Z小学校女性教諭A氏の授業観察記録をもとに、A教諭の授業における指導の特徴を分析し、児童個々を十分に観察して適切な評価言を与えることがリコーダー技術の向上につながることを述べた。③小学校教員養成系大学に所属する学生にリコーダー学習指導法をどのように学ばせるかについて、筆者の講義「音楽科教育法」の一部を報告しながら述べた。

はじめに

本稿は、小学校音楽科における表現領域器楽の指導内容であるリコーダー学習はどのように扱うべきかについて提言するものである。リコーダー学習は、通常小学校第3学年から開始され以後高等学校に至るまで音楽科授業において系統的に行われる。特に小学校における初期段階の指導は、適切に施されることが重要である。その初期段階の指導が、児童にとってのその後のリコーダー学習の進展や演奏技術の向上に、多大な影響を与えるからである。したがって本稿は、小学校における初期段階の望ましい指導の在り方を中心に論述する。

本稿が、小学校音楽科のリコーダー学習指導について述べるその他の理由は以下である。我が国では多くの優れた音楽教師によって、児童に対して効果的なリコーダー学習が進められているという好ましい現状も多々見受けられる。しかしながら、一方では、多くの児童がリコーダー奏法を十分には習得できず、なかには挫折を味わう児童も出現するという現状も否定しがたい。また、これから音楽科授業を担当する若い教師や教職希望の大学生にリコーダー学習指導に関する適切な情報を提供すること等のためにもリコーダー学習指導の在り方は問い続けられ、検討されるべきものである。したがって

て本稿の目的は、上述の点について寄与することにある。

本稿は3章からなる。第1章では、筆者自身の実践経験に基づきながら、一般的なりコーダー技術指導における指導上の留意点について提言する。第2章では、広島市内Z小学校女性教諭の授業観察記録をもとに、授業における指導の特徴を分析し提言する。第3章では、小学校教員養成系大学に所属する学生に、リコーダー学習指導法をどのように学ばせるかについて提言する。

1 リコーダー技術指導の主なポイント

リコーダー学習の最終目標は、児童がリコーダーに親近感や愛着を抱くようになること、リコーダー演奏が自在に行えること、リコーダー学習をとおして音楽一般に対する愛好心がより向上することと言える。これらの実現に不可欠な前提とは、児童がリコーダー奏法に関する正しい理解をもっているとともに確かな技術を身に付けていることと言える。つまり、リコーダー学習の初期段階の指導から、リコーダー奏法に関する正しい理解の促進と技術の習得を図ることはリコーダー学習指導の非常に重要なテーマと言える。本章では技術指導の最も重要なポイントとは何かについて、筆者の26年に及ぶ現場実践経験に基づき説明する。

リコーダー技術指導の主なポイントは、息づかい（ブリージング）、指づかい（フィンガリング）、舌づかい（タンギング）の3つである。この3つは、非常に重要なリコーダー奏法の技術である。また、この3つは、その習得が決して容易ではなく、ていねいかつ長期間のエクササイズやレッスンによって身につくことが可能となるものである。さらに、この3つの指導は、初期段階に適切な指導を施すことが極めて重要となる。ここで言う適切な指導とは、この3つに関する誤った技術、つまり間違った悪い癖を身に付けることが必ずないようにすることである。もし仮にそのような誤った技術が習慣化すると、決して満足のゆく演奏表現には至らず、誤った技術を矯正することは並大抵ではない。

3つそれぞれについては詳細に後述することとし、ここでは、姿勢・構え（フォーム）の指導について述べる。姿勢・構え（フォーム）は、適切な息づかい、指づかい、舌づかいにつながる重要なポイントである。フォームは、立奏でも座奏でも、背筋は真っ直ぐに伸ばし、顔は正面にし、肩の力を抜いた自然な形がよい（p.166に写真掲載）。身体全体をできるだけリラックスさせることが望ましい。そのようなフォームになっているかどうかは、一目瞭然で容易に判別可能である。指導にあたっては、指導者が常に児童のフォームの状態に目を配り、フォームが崩れていれば適宜修正を促す注意を与えることが求められる。

(1) 息づかい（ブリージング）の指導

リコーダーの息づかい（ブリージング）は、呼吸に関する微細かつ感覚的なコントロールに支配されている。したがって、言葉では非常に説明しにくく、指導でよく用いるのは、比喩的言語の活用である。低い音域を演奏する場合は、かなり遅めの呼吸を慎重に入れる必要があり、「ロウソクの火が消えないような息づかいで」などの言葉で伝えることが有効である。また、口腔内をやや広げるようにすると低音域の発音がしやすくなる。高音域を演奏する場合は、やや速めの呼吸を歌口に送り込む必要がある。そのために、口腔内を狭めて呼吸を送り込むようにする。

さらに、スムーズな息づかいのためには、頬の筋肉を常に十二分にリラックスさせておくことがポイントである。リラックスした頬の筋肉は、呼吸を柔軟にし、呼吸の流れをなめらかにするので、リコーダー特有の柔らかい暖かみのある音色を作り出す。頬の筋肉のリラックスを児童に理解させるためには「美味しいものを食べたときの、ほっぺたが落ちるような感じで」という比喩的言語が有効である。

なお、指導に際しては、児童の息づかいの状態を、注視するとともに児童の発するリコーダーの音色を聴き取って判断し、最適な助言をすることが重要である。

(2) 指づかい（フィンガリング）の指導

リコーダーの指づかい（フィンガリング）は、音孔を正しい指の形で要領よく確実に塞ぐことが重要である。確実に塞ぐことができなければ、正しい音を出すことはできない。指づかいも、教師が児童の状況をしっかり見極めて適切な指導をすることが大切である。特に、指先ではなく、指の腹の部分で楽に無理なく塞ぎ切れているかどうかに着目して指導することが望ましい。

指づかいの最も重要な点は、左手と右手の位置関係が逆にならないよう注意することである。リコーダーのそれぞれの手の位置は構造上からも様式の点からも、左手が上で右手が下になるようにしなければならない。もし仮に左右が逆のままという悪い癖が身につけてしまうと、それを修正するのははなはだしく困難である。したがって指導の際は、このことにとりわけ留意し児童の左右の手の位置が正しいかどうかを注視する必要がある。

次に、塞いでいないときの指の位置は、できる限り敏速にいつでも音孔を塞ぐことができる状態に置くこと、つまり音孔から少し浮かしたぐらいの位置に留める方が合理的である。その方が速いパッセージを演奏する場合に都合がよいので、初期段階からそのような望ましい指の位置を習慣化しておくことと優れた演奏の実現に近づくことができる。

また、リコーダーにはジャーマン式とバロック式の2つの種類がある。その2つの大きな違いは運指が異なることである。したがって、ジャーマン式のリコーダーを用いて学習する際はジャーマン式の運指を習得させること、バロック式のリコーダーを用いて学習する際はバロック式の運指を習得させることに留意しなければならない。なお、バロック式の運指の方が、塞ぐ音孔が多く習得に時間がかかるように思われがちだが、いったん習得すれば不便を感じることはない。

(3) 舌づかい（タンギング）の指導

リコーダーの舌づかい（タンギング）は、音の立ち上がりを鮮明に、また、美しいものにする重要な技術である。優れたタンギングは、洗練されたリコーダー演奏表現を実現させるためのポイントである。タンギングの仕方は、リコーダーの音を開始する際に、その直前に舌を唄口につけて、呼気の開始と同時に素早く引っ込める。つまり、音の開始と同時に「トゥー」と発音するという技術である。タンギングは口腔内での作業であるためか、児童は理解しにくいという側面がある。そのため、児童はタンギングをしないまま演奏したり、またはタンギングが乱暴だったりしがちである。タンギングをした場合としていない場合の違いを、感覚的にも聴覚的にも何度も確認させながら、ていねいに指導することが大切である。

2 広島市内Z小学校A女性教諭のリコーダー指導

筆者は、2016年4月から2016年10月までの夏季休み期間を除くほぼ毎週水曜日に広島市内Z小学校第3学年の授業を観察した。授業者は、Z小学校音楽専科のベテラン女性教諭A氏であった。A教諭は、広島市内において優秀な音楽科教員として定評があり、特に合唱指導に秀でていることが周囲の認めるところである。さて、小学校音楽科では第3学年からリコーダーの学習が始まる。したがって、筆者はA教諭の第3学年児童に対するリコーダー学習の初期指導を観察できた。本章では、A教諭のリコーダー学習指導の特色を筆者の視点で紹介する。

(1) A教諭の発声指導

A教諭が行う音楽指導実践の最大の特徴は、卓越した発声指導にある。A教諭は、すべての児童に様式化された発声を習得させる。児童の歌声は、力強さと安定感あふれるレベルの高いものである。その指導の特徴は3点である。第1は、児童に発声のポイントをかみ砕いて分かりやすく提示し、児童自らが発声のポイントを理解し意識して発声できるように促すことである。第2は、児童1人ひとりを机間指導によって細かく観察し、場合によってはその場で即時に指導することである。第3は、優れた発声をする児童を全員の前に出しモデル唱させることで、より良い発声のポイントを共有化させていくことである。筆者の観察した授業においても、A教諭の発声指導の特徴は遺憾なく発揮されていた。音楽室に響く歌声は、非常に質の高い洗練されたものであった。

(2) A教諭のリコーダー指導

A教諭のリコーダー指導も、基本的な指導方針は発声指導と同様と言ってよい。リコーダー指導のポイントを実に分かりやすく巧みに児童に伝え、児童は確実にリコーダーを学習していく。下の写真は、A教諭が自作されたリコーダー学習用の掲示物である。常に児童の目に入る音楽室前面に掲げている。



写真 2 小学校音楽室前面にあるリコーダー学習用掲示物

① 2016年5月11日（水）3年1組の授業より

【姿勢（フォーム）の学習場面】

A教諭「はい、では今からリコーダーの名人になる勉強をします。基本の姿勢で構えてね」

（児童は、さっとリコーダーを吹く姿勢をする。A教諭は、1人ひとりを見渡す。）

A教諭「じょうず。基本の姿勢、よく覚えていました。基本の姿勢ができる人は必ず名人になれます」

（さらに、児童たちの姿勢がよくなる。）

A教諭「おや、手が反対の人がいます。みんなで注意してみてあげましょう」

（お互いに修正しあう。）

【発音する場面】

（B4（1点口）の音を2分音符で3回吹く。《教師→児童》と交互に数回練習する。）

A教諭「音を揃えて切ることを気をつけましょう」

【「息づかい」の学習場面】

A教諭「今日は、さらに息の使い方の勉強をします。息の入れ方を工夫して吹きたいと思います」
「まずは、ジャイアの息で」

(A教諭が意図的に大量の息を急速にリコーダーに吹き込む。これは悪いモデルの提示である。)

A教諭「次は、ゆうれいの息で」

(A教諭がごく少量の息を不安定にリコーダーに吹き込む。これも悪いモデルの提示である。)

(児童たちは、口々にジャイアの息も、ゆうれいの息も「おかしい」と言う。)

A教諭「では、どんな息がいいのかな？各自研究してみよう」

(児童たちは、それぞれが試行錯誤しながら吹く。)

A教諭「じゃあ、誰に発表してもらおうかな。」

(数人が指名されて、1人ずつ息を吹き込む。ほぼ全員、適切な息の量で安定した音を出す。)

A教諭「こんな息の入れ方は何と言うかな。教科書に書いてあります。大きなシャボン玉をつくるときのような息ですね。さあ、みんなもストローを持ったつもりで、吹いてみましょう」

「そして、耳で聴いて、まっすぐな息が入っているか確かめましょう。じゃあ、1人ずつ順に吹きますよ。」

(1人ずつ順に発音する。A教諭はそれぞれを丹念に観察し、個々の状況を把握していく。)

② 2016年5月17日(水)3年1組の授業より

【姿勢(フォーム)の学習(復習)場面】

A教諭「さあ、今日もリコーダーじょうず君になりますよ。いつも覚えててね。名札がついている方の手で「シ(B4)」を押さえますよ」

(児童はリコーダーを構える。A教諭は1人ひとりを観察して手の位置、姿勢を確認。)

A教諭「いつものようにまねっこ遊びをするよ。息はジャイアんでやろうかシャボン玉でやろうか」

(児童、口々に「シャボン玉で」。)

【「舌づかい」の学習場面】

A教諭「『笛星人』を演奏しましょう。笛星人はハッキリとしゃべります」

(児童は一斉に、「シ(B4)」のみで作曲されたタンギング練習曲『笛星人』を演奏する。)

A教諭「笛星語は途切れ途切れには話しません。言葉がブツブツ切れないように、つまりつながるように発音します。言葉がつながって聞こえることが大切です」

(児童は、舌の力が抜け、自然な舌づかいで演奏するようになる。)

A教諭「とってもステキな笛星語になったね。とってもつながって聞こえてるよ」

(3) A教諭の指導から示唆されること

A教諭のリコーダー指導の特徴は、①とても分かりやすい言葉で児童に説明すること、②良いモデルも悪いモデルも、それぞれを明確に示すこと、③必ず1人ひとりの状況を確認すること、④児童の変容を即座に評価すること、などである。さらに、最も重要な点は、リコーダー技術指導におけるポイントである、息づかい、指づかい、舌づかいの3つのポイントを確実に押さえて指導していることにある。A教諭の指導は、リコーダー技術指導の望ましいモデルと言えるものである。

3 講義「音楽科教育法」におけるリコーダー学習指導の扱い

児童にリコーダー初期指導を行う教師は、小学校の教師である。そして初期指導が重要であることを鑑みれば、小学校教師のリコーダー指導はよりの確により確実に実践されねばならない。したがって、教員養成系大学における音楽科に関わる教職系講義において、どのようにリコーダー学習指導の望ましい在り方を教員志望学生に学ばせるか、このことは大きなテーマとなり得る。本章では、筆者が所属する大学で筆者の担当する講義「音楽科教育法」において、リコーダー学習指導をどのように行っているかを概説する。

講義「音楽科教育法」は、小学校教諭免許取得に必須の教職科目である。例年50名程度の小学校教員志望学生が履修する。全15回のうち、リコーダーを扱うのは、第8回（リコーダー学習第1回）、第9回（リコーダー学習第2回）、第10回（リコーダー学習第3回）、および第11回（リコーダー学習第4回）の計4回である。この4回の授業では、学生に自己所有のソプラノリコーダーを持参させている。

(1) リコーダー学習第1回

リコーダー学習第1回は、①ソプラノリコーダー・アルトリコーダー・テナーリコーダー・バスリコーダーの4種のリコーダーの実物を提示するとともに、それぞれの音を聴取させる。②リコーダーを児童に練習させる上でのマナーを指導することの重要性を説明する。そして、③適切な息づかい、指づかい、舌づかいの3点の重要性を説明し、次にその3点に関する実技指導を学生に実施する。その際、児童への指導の仕方を併せて概説する。④小学校音楽科教科書からリコーダー学習に関するものを抽出して提示し、授業におけるリコーダー学習のプロセスを理解させるとともに、そのプロセスに沿って学習を体験させる。

学生は、リコーダーに関する知識量が乏しい傾向にある。小学生の時以来、久しぶりにリコーダーを吹くという学生もかなりいる。したがって、上記①～④をていねいに学習させることが、改めてリコーダーについて正しく学ぶ機会になる。当然だが、習熟の度合いは児童に比べきわめて早い。適切な息づかい、指づかい、舌づかいの把握も非常にスムーズである。

(2) リコーダー学習第2回

リコーダー学習第2回は、①『少年時代』（井上陽水作詞 井上陽水・平井夏美作曲）を歌唱させる。②『少年時代』をソプラノリコーダーで2部合奏させる。『少年時代』は、歌唱でもリコーダー演奏でも豊かな感動体験をもたらすすばらしい楽曲である。この曲は、学生に音楽科学習を実体験させる上で最も適した曲と言える。筆者は、この『少年時代』の学習をとおして、リコーダーを演奏することの良さを十二分に堪能して欲しいと願って実践している。毎年、学生の反応もとてもよく、『少年時代』の合奏は、リコーダーの魅力の再認識の場となっている。

(3) リコーダー学習第3回・4回

リコーダー学習第3回・第4回は、歌唱共通教材24曲をリコーダーでは演奏できない数曲を除いて、すべて練習させる。その練習は、全曲を共通教材の歌詞での歌唱、階名唱、リコーダー演奏の順で行うものである。

歌唱共通教材24曲は、小学校音楽科教育にとって重要なレパートリーである。したがって、小学校の教師は何よりもこの24曲に習熟しておくべきである。しかし、24曲をすべて歌いこなせる者は少ない状況にある。教員志望学生には、24曲を十分に学習させる必要がある。リコーダー学習第3回・4

回の練習は、非常に効果が高く、学生の読譜力の向上にもつながっている。

おわりに

小学校におけるリコーダー学習指導は、教師にていねいさと根気強さが求められる。重要な3つの技術的ポイント、すなわち息づかい、指づかい、舌づかいを、児童が常に正しく習得できるよう、A教諭のように児童個々をていねいに観察し、適切な指導言を発することがきわめて重要である。これから教壇に立つ未来の小学校教師たちには、このことを十分に理解し、指導法を学び、自らの授業実践に生かして欲しい。当然ながら、現役の教師たちには、リコーダー学習指導の在り方を見直しつつ、より良い実践を実現するために研鑽を積み重ねて欲しいものである。

《引用参考文献》

- 1) 吉富功修 (2001) 「リコーダーの基礎知識」『音楽科重要用語300の基礎知識』明治図書, p.95。
- 2) 吉富功修 (2010) 「2. 器楽 1) リコーダーの奏法」『小学校音楽科教育法—学力の構築をめざして—』ふくろう出版, pp.14-17。

〈キーワード〉

小学校音楽科, リコーダー奏法, 技術指導, 音楽科教育法, 授業実践

緒方 満 (現代文化学部子ども発達教育学科)

(2016. 10. 31 受理)